

国立国語研究所学術情報リポジトリ

日本語母語話者と学習者による前置き表現の印象の相違

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2019-03-05 キーワード (Ja): キーワード (En): preliminary phrases, expressing opinions, reactions, considerations, persuasion 作成者: 山下, みゆき, YAMASHITA, Miyuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001905

日本語母語話者と学習者による前置き表現の印象の相違
Differences in the Impressions of Introductory Remarks
 by Native Japanese Speakers and Japanese Learners

山下 みゆき

YAMASHITA, Miyuki

要旨

日本語母語話者及び中国人・韓国人学習者に意見提示の前置き表現の印象調査を行った結果、次のことが観察された。①全体的に日本語母語話者と中国人学習者は前置き表現の使用を評価していた。②日本語母語話者には用例間で前置き表現の評価に差が見られたが、中国人学習者には差が見られなかった。③日本語母語話者は説得の下地を築いたり対人的な配慮を示したりする前置き表現を、韓国人学習者は意見を明確に述べる機能を持つ前置き表現を高く評価した。

前置き表現の研究は、作文指導の他にもスピーチの意見表明や聴解・読解指導における意見箇所の予測にも応用可能な意義あるものである。

キーワード: 前置き表現 意見提示 印象 配慮 説得

1. はじめに

日本語学習者が、意見文、レポートの作成、論文執筆、発表の資料作成等の主張が含まれる文章を書く機会が多い。意見文については、これまで木戸 (2001)、梶本 (1997)、坂東 (1998) らが、日本語母語話者と学習者の意見文を比較し、その文章構造の違いを明らかにしている。しかし、文章研究や作文教育研究の知見を教育現場に応用し、学習者が説得力のある意見文を書けるように指導するためには、さらなる研究の広がりと進展を待たねばならない。

一方、最近では、意見表明を語用論や言語行動論に関連付ける研究も見られるようになった。李 (1999) は、日本人と韓国人の反対意見表明に関する対照社会言語学的研究を行い、山下 (2001) は、意見文における意見提示行為を Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論に結び付けて考察している。

日本語の談話の特徴として、話し手が周囲の状況に配慮し、自分だけを強く押し出すことを避けるストラテジーを用いることがメイナード (1993) により報告されている。意見文の目的は、書き手が読み手に主張を伝えることであるから、書き手は自説が円滑に受け入れられるように気配りをしながら、慎重に表現の選択を行う。意見提示の書き手のストラテジーは、文章構造の工夫や婉曲的な文末表現の使用等様々であるが、主張の直前に置

かれる前置きもその一つである。

日本語学習者は、この前置きをどのようにとらえているのだろうか。日本語母語話者と学習者で前置きに対する印象が異なるとすれば、意見文を書く際に用いる意見提示方法にも影響があるはずである。

前置き表現を含む意見提示について調べる足掛かりとして、本稿では、日本語母語話者及び学習者が意見文を読んだときの前置き表現に対する印象の相違を調べ考察を行う。

2. 先行研究

2.1 ポライトネス理論及び語用論

Brown & Levinson (1987) は、「人間には面子に関わる欲求があり、相互の人間関係の維持を望むならばそれを互いに脅かさないように行動(言語使用)しようとする」(生田 1997) とした。また、リーチ (1987) の丁寧さの原則には、気配りの原則、寛大性の原則、是認の原則、謙遜の原則、合意の原則、共感の原則がある。意見文執筆者が行う読み手や関係者への配慮は、これらの理論に通ずるものがある。

2.2 前置き

国語審議会の最終答申(第 22 期 2001 年 12 月)では、友人に約束を変更してもらう場合の「悪いけど、急な用事が入ったので、待ち合わせの時間をずらしてくれない?」の「悪いけど」等が、「相手や場面に配慮して使い分ける言葉遣い」である「敬意表現」として新たに提唱された。これまで、前置きに関する表現は取り立てて議論されることが少なかったが、今後は学校教育においても敬意表現の指導が開始されることから、異なる展開が期待される。

杉戸 (1998) は、高校生を対象にした依頼場面の面接調査で、ほとんどの被験者が「夜分遅くすみませんが」等の前置きを含む回答を行ったと報告し、このような表現を「前置き表現」と呼んでいる。本研究でもこの「前置き表現」という用語を用い、書き手が意見を述べる言語行動を意見提示と名付け、主節や意見を表す箇所に行先し意見導入のクッションとして用いられる、読み手への対人的な配慮を示す文の要素を前置き表現と位置付ける。

2.3 意見提示における前置き表現

日本語母語話者と韓国人日本語学習者の話し言葉における意見提示の相違を分析した研究は二つある。反対意見表明に的を絞る、日本人及び韓国人大学生の言語使用を調べた李 (1999) は、日本語における反対意見表明行動の特徴は、常に話し手を意識し対人的な配慮を積極的に示す人間関係を重視したものであるとした。また、李 (2001) は、日本語母語話者及び韓国人学習者の議論の場における言語行動を比較し、前者は自分の考えをスト

レートに表現する自己主張優先型より相手配慮型を好む傾向があると結論付けている。

書き言葉における前置き表現について述べたものには、山下（2001）の、アジア7か国の学習者が書いた意見文の前置き表現の特徴を示し、学習者が効果的に前置きを活用した意見文を書くための指導法を提案したものがある。

さらに、山下・ファン（2001）は、日本語母語話者と中国人学習者の前置き表現の使用の実際を調べ、前者の方が数及びバリエーションともに豊富だったこと、後者は前置き表現ではなく、事実を羅列したり常識であることを強調したりする手段を用いて意見をサポートする傾向があったことをまとめている。

3. 前置き表現の印象調査の概要

本研究では、日本語母語話者と学習者が意見提示箇所を読んだときに受ける前置き表現の印象を比較するために調査を行った。協力者の内訳は、中国人日本語学習者 22 名、韓国語日本語学習者 20 名、日本語母語話者 20 名である。今回の調査では、様々な国籍を持つ学習者の中で、国内で最も多くの割合を占める中国及び韓国の学習者に協力を依頼した。日本語能力の差による印象の偏りを防ぐため、外国人調査協力者は日本語能力試験一級合格者、又は一部、一級に相当する能力を保持していると筆者が判断した学習者に絞った。その結果、大学院に在学中である協力者が大半を占めていた。

日本語母語話者を含む調査協力者全員にクローズドテストを行った結果、日本語母語話者の平均は 95 点、外国人日本語学習者の平均点は 81 点で、各言語グループ内での最低及び最高得点に大きな差は認められなかった。日本語母語話者と学習者の日本語力の差が前置き表現の印象の差に全く影響を与えないとは言えないが、今回の調査では協力者の学習背景等を考慮し、彼らの日本語能力を許容範囲とした。

調査で協力者が読む意見文として、複数の新聞から前置き表現を含む投書を抽出し、異なる機能の前置き表現が使用されている六つの投書を選んだ。

投書は不特定多数の読者を想定した意見を表す文章であり、様々な意見を持つ読者に配慮が示され主張が展開される。本調査には、脳死の臓器移植について書かれた投書（1997 年 6 月～1999 年 7 月）を複数の新聞から採集した。この内容の投書を選んだ理由は、話題について賛否両論の意見があるため、書き手が意見提示の際に様々な読み手に配慮を行うことが予測されたからである。臓器移植法は 1997 年 6 月に国会で成立し、同年 10 月に施行され施行後初の移植が 1999 年 2 月に行われた経緯があり、調査を実施した 1999 年には読者の関心が高い話題であった。

調査では、調査シートの最初の部分に臓器移植について簡単な説明を記し、理解できない語句については辞書の使用を認めた。調査協力者に前置き表現を含まない意見提示と前置き表現を含む意見提示を読み、印象がどう変わったかを項目にしたがい 5 段階評定を行

うよう指示した。

調査に用いた前置き表現(各用例の下線部)を含む意見提示箇所は以下のとおりである。各用例の前置き表現の機能は、それぞれ、主張の権威付け(用例 1)、説得の下地作り(用例 2)、前提になる事柄の提示(用例 3)、話題に関与する人への配慮(用例 4)、意見及び範囲の限定(用例 5)、書き手の謙遜の表示(用例 6)である。

(用例 1)・・・小林さんのおっしゃるように、ドナーの数はまだ十分とは言えるものではありませんので、ドナーを増やす活動を皆で行なっていくべきだと思います。

(用例 2)・・・重大なニュースであることはわかるが、一体どれだけの人が臓器移植の推移のささいなことまで逐一知りたいと求めているであろうか。

(用例 3)・・・ドナーだけでなく、移植を受ける側でも「受ける権利」「受けない権利」がともに自由意思で選択されることは忘れてはならない点ですが、終末医療の保証があってはじめて「受けない権利」と「受ける権利」がフェアに選択できるのではないのでしょうか。

(用例 4)・・・遺族の悲しみは計りしれないものであろうが、これから患者の臓器は移植手術を受けた 6 人の体の中で機能し続けると思う。

(用例 5)・・・臓器移植自体を否定するつもりはない。しかし、低体温療法など、脳死患者を救う方にも同様に目を向けるべきではないか。

(用例 6)・・・私たちも年齢的に臓器提供の資格があるかどうか定かではないが、夫と私はこれを機にドナーカードを持とうと決めた。

評定項目は、用例に含まれる各前置き表現の機能を考慮し前置き表現の効果を、効率的な意見表明の手段、書き手の態度や読み手への配慮の表示、理解の補助の三つに分け、その観点から具体的な項目を決定した。項目としては、前置き表現により、説得力が出た、押し付けがましくなくなった、丁寧になった、遠慮がちになった、誠実になった、意見が明瞭になった、へりくだっている、読み手を尊重している、話題にのぼった人を尊重している、分かりやすくなった、を挙げた。5 段階中、5 には肯定的な意味を持つ内容を設けた。例えば、「説得力が出た」については 5 が「説得力が出た」だが、「押し付けがましき」については「押し付けがましくなくなった」を 5 に指定した。つまり、数値が高くなればなるほど前置き表現を肯定的に評定したことになる。

最後に、「下線部(前置き)がある文とない文では、どちらが『いい意見提示』の仕方だと思うか」という質問も設けた。

調査シートを回収した後、記述された内容を基に疑問に思った点や気になった点を聴取するため、一部の協力者に 15 分程度のフォローアップインタビューを行った。

4. 結果と考察

調査後、用例の評定、項目別の評定、用例別及び項目別の評定、前置き表現の有無に関する評定の四つの観点から母語別に調査の結果を分析した。

4.1 用例別の評定

表 1 は各母語話者が行った用例別の前置き表現の評定（平均値）である。CJL は中国人学習者、KJL は韓国人学習者、JNS は日本語母語話者を指す。

〔表 1: 用例別の評定（平均値）〕

	CJL	KJL	JNS
用例 1（主張の権威付け）	3.50	3.56	3.52
用例 2（説得の下地作り）	3.29	3.16	3.27
用例 3（前提になる事柄の提示）	3.63	3.55	4.20
用例 4（話題に関与する人への配慮）	3.52	3.46	3.53
用例 5（意見の及び範囲の限定）	3.30	3.37	3.56
用例 6（書き手の謙遜の表示）	3.30	3.19	3.04
合計	20.54	20.29	21.12

平均値の合計を見ると、日本語母語話者の評定が高いが、すべての用例における評定の数値が高いわけではない。用例別に他のグループの数値と比較すると、用例 3 及び用例 5 の値が高いことが分かる。

特に差が著しかった用例 3 には、「ドナーだけでなく、移植を受ける側でも『受ける権利』『受けない権利』がともに自由意思で選択されることは忘れてはならない点ですが、・・・」が含まれている。同用例に対する日本語母語話者の数値が高かったのは、この前置き表現により書き手が読み手との共通認識を確認してから主張を行うことが効果的な意見提示方法だと判断されたからであろう。この表現は、コンテキストを共有することにより、相手と共通の興味を強調したり他者から認められたいという相手の気持ちを満たしたりするポジティブボライトネスに関係すると思われる。

また、同用例の前置き表現が長いことも結果に影響を与えたようだ。学習者は意見の前に長い前置きを置くことを好ましいと思っていないのではないか。日本語母語話者は前置き表現を意見提示のクッションとして用いることを認識している一方で、学習者には長い前置きは主張箇所を曖昧にする不必要なものと受けとられた可能性が高い。実際、フォローアップインタビューで、ある韓国人調査協力者は「判定項目に『くどくなった』があってもよかった」と答えていた。

4.2 項目別の評定

次に、母語ごとに項目別の評定を比較する。

[表 2: 項目別の評定]

	CJL	KJL	JNS
項目 1 (説得力)	3.52	3.57	3.46
項目 2 (押し付けがましさ)	3.24	3.00	3.04
項目 3 (丁寧さ)	3.56	3.33	3.55
項目 4 (遠慮がち)	3.42	3.18	3.12
項目 5 (誠実さ)	3.21	3.35	3.33
項目 6 (意見の明瞭さ)	3.43	3.59	3.43
項目 7 (へりくだり)	3.33	3.18	3.30
項目 8 (読み手の尊重)	3.37	3.30	3.25
項目 9 (話題にのぼる人の尊重)	3.53	3.53	3.60
項目 10 (分かりやすさ)	3.54	3.78	3.44
合計	34.15	33.81	33.54

評定の合計は CJL, KJL, JNS の順に数値が高かった。ここでは、項目間で差が見られた KJL と JNS を詳しく観察する。韓国人学習者では、項目 1 (説得力)、項目 6 (意見の明瞭さ)、項目 10 (分かりやすさ) の評価が高く、項目 2 (押し付けがましさ) 及び項目 4 (遠慮がち)、項目 7 (へりくだり) 等の前置き表現の数値は低い。韓国人学習者に支持された前置き表現は意見を積極的に分かりやすく伝えることに関係があり、支持があまり得られなかった項目は書き手の謙虚さの表示や読み手への配慮に関わる内容であった。この点から、本調査では韓国人学習者は読み手に配慮する表現より意見を明確に述べる前置き表現を高く評価したといえる。

日本語母語話者の場合、項目 3 (丁寧さ) 及び項目 9 (話題にのぼる人の尊重) が高く、項目 2 (押し付けがましさ) は韓国人学習者同様低かった。日本語母語話者は他の項目より丁寧さや関係者に配慮した表現を高く評価したことになる。丁寧さ及び話題にのぼる人への尊重を表わす前置きは、中国人学習者でも高い値を示した。

三つの母語グループ間で分散分析を行った結果、項目 3 (丁寧さ, $p<.05$)、項目 4 (遠慮がち, $p<.01$)、項目 10 (分かりやすさ, $p<.05$) に有意差が見られた。

さらに詳しい分析を行うために多重比較を行った結果、有意差が見られた項目を下記の表にまとめた。“○”は三つの言語話者中、二つの母語話者間で有意差があったことを、“高”“低”は両者の数値の高低を表している。

[表 3: 二言語母語話者間で有意差が見られた項目]

	CJL	KJL	JNS	有意水準
項目 2 (押し付けがましさ)	○高	○低		$P<.05$
項目 3 (丁寧さ)		○低	○高	$P<.05$
項目 3 (丁寧さ)	○高	○低		$P<.05$
項目 4 (遠慮がち)	○高		○低	$P<.01$
項目 4 (遠慮がち)	○高	○低		$P<.05$
項目 10 (分かりやすさ)		○高	○低	$P<.01$

項目 2（押し付けがましさ）は、CJL と KJL 間に有意差があった。つまり、韓国人学習者に比べ中国人学習者は前置き表現により、意見が押し付けがましくなくなったと感じたという結果が得られた。項目 3（丁寧さ）では KJL と JNS 間、CJL と KJL 間でそれぞれ有意差があり、どのグループ間でも KJL は低い値で、前置き表現により丁寧さが増したと回答された値は低かった。項目 4（遠慮がち）では、CJL と JNS 間、CJL と KJL 間で CJL が高い数値を示した。すなわち、中国人学習者は他のグループと比較して、前置き表現があると遠慮がちになるととらえる傾向があった。項目 10（分かりやすさ）は、韓国人学習者が日本語母語話者より前置き表現があった方が分かりやすいと判断した。他の項目ではすべて KJL の値が低い、この項目のみ逆であった。

全体的に中国人学習者は前置き表現の使用を評価しており、韓国人学習者は分かりやすさに関する項目以外はあまり評価していないことが観察された。

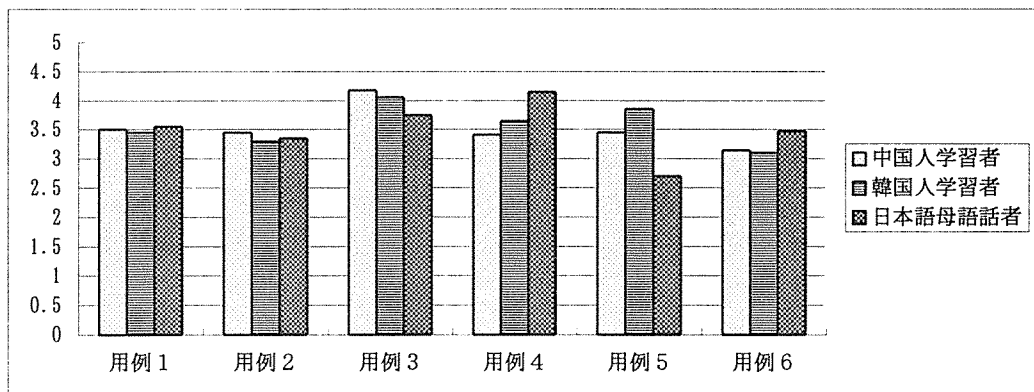
4.3 用例別及び項目別の評定

4.1 では用例別に、4.2 では項目別に、母語グループごとの前置き表現に対する印象の異なりを述べた。次に、母語別に差が顕著だった評定項目を取り上げ用例別に考察する。

4.3.1 説得力についての評定

グラフ 1 は前置き表現により説得力が増したかを調査協力者に問うた結果である。S 軸は各用例を、Y 軸は 5 段階の評定を表す。

[グラフ1:説得力]



用例 4（話題に関与する人への配慮）は、日本語母語話者の数値が高い。この「遺族の悲しみは計りしれないものであろうが、・・・」は、書き手の関係者への気配りを示している。彼らがこの表現を説得力の強化に結び付けたのは興味深い。

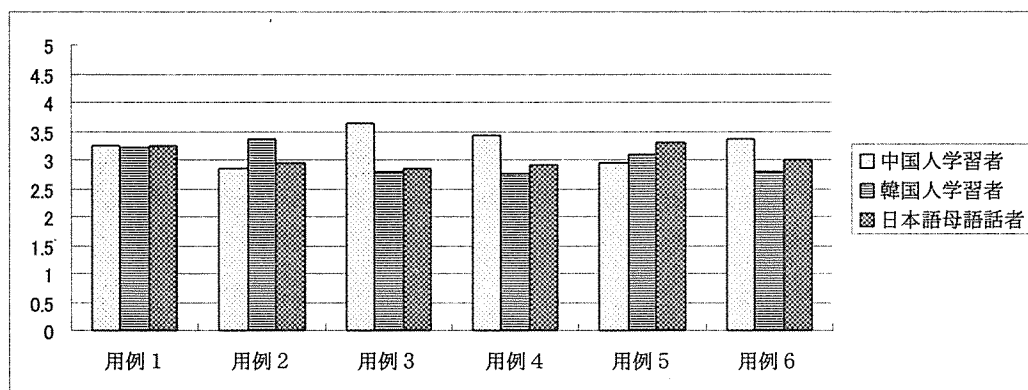
用例 5（意見の及ぶ範囲の限定）では、逆に日本語母語話者の評定が学習者より低い

が目立つ。この用例は「臓器移植自体を否定するつもりはない。しかし・・・」という前置き表現を含むが、日本語母語話者はこの表現により意見に説得力が出たとはとらえなかった。確かに、意見の及ぶ範囲を限定して主張を述べることは主張に説得力があるというより、書き手の態度が消極的だと受けとられかねない。

4.3.2 押し付けがましさについての評価

グラフ 2 は、前置き表現により意見の押し付けがましさに関する印象がどう変化したかを表している。

[グラフ 2: 押し付けがましさ]



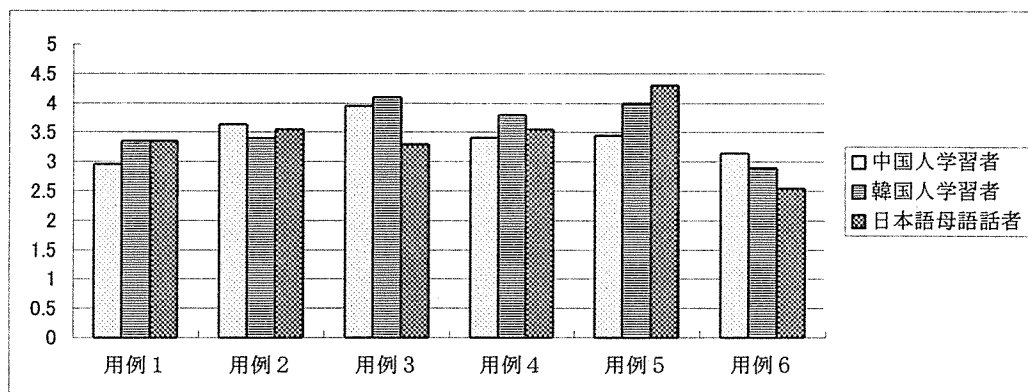
基本的に前置き表現は、他者に邪魔されたくないという相手の面子を保つ機能を保持していると考えられるが、これは押し付けがましさと最も関連がある。

用例 3 (前提になる事柄の提示)、用例 4 (話題に関与する人への配慮)、用例 6 (書き手の謙遜の表示) を見ると、CJL の数値が高い。これらの用例に含まれる前置き表現により、中国人学習者は他のグループより押し付けがましくなくなったと感じた結果が得られた。山下・ファン (2001) は、中国人学習者の前置き表現のとりえ方が日本人とは異なる可能性があることを報告しているが、本調査でも押し付けがましさに関する印象において同様の傾向が見られた。

4.3.3 意見の明瞭さについての評価

グラフ 3 は前置き表現により意見が明瞭になったかを表す評価の結果である。

[グラフ3:意見の明瞭さ]



用例 3（前提となる事柄の提示）の「ドナーだけでなく、移植を受ける側でも『受ける権利』『受けない権利』がともに自由意思で選択されることは忘れてはならない点ですが、・・・」に対する、日本語母語話者の数値は低く、「意見が明瞭になった」と評価していないのに対して、学習者の数値は高い。主張の前に長い前置きを置くことは後続する意見を分かりにくくする危険性を伴うが、なぜ両学習者がこの表現により「意見が明瞭になった」ととらえたのか理由は分からない。

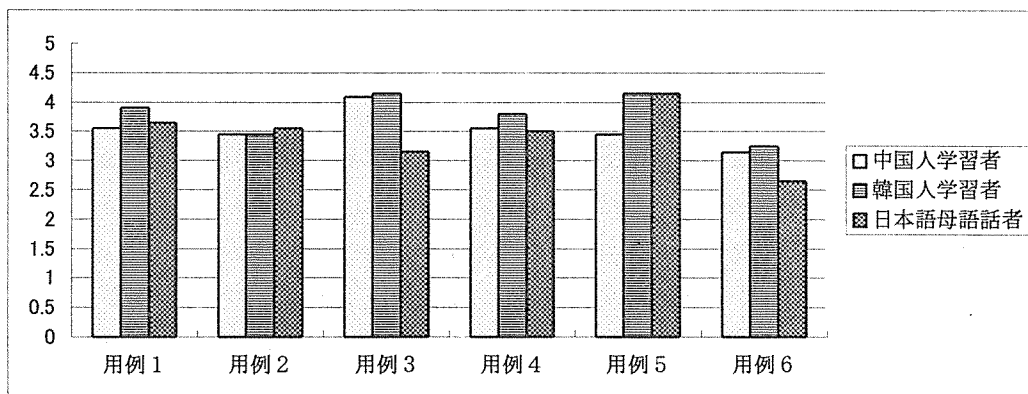
用例 5（意見の及ぶ範囲の限定）では、日本語母語話者は学習者より「意見が明瞭になった」と判定している。彼らは、「臓器移植自体を否定するつもりはない。しかし、・・・」により、書き手が意見の及ぶ範囲を絞ることで意見自体も明確になったととらえたようだ。

韓国学習者の判定は日本語母語話者には及ばないが、それに近い値を示した。

4.3.4 分かりやすさについての評定

前置き表現により、分かりやすさが増したかどうかを示したのがグラフ 4 である。

[グラフ4:分かりやすさ]



日本語母語話者と学習者の差が表れているのは、用例 3（前提となる事柄の提示）及び用例 6（書き手の謙遜の表示）である。どちらも日本語母語話者の数値が低い。用例 3 については、4.3.3 でも述べたように、他の用例と比較して長い前置き表現が追加されたため、日本語母語話者が「分かりにくくなった」ととらえたことは納得できる。それに対して学習者は前置きを挿入部とはとらえずに意見と区別しなかったため、異なる数値が得られたのだろうか。山下・ファン（2001）では、前置き表現には意見提示の opening marker としての働きがあることが述べられている。日本語母語話者にとってその marker は共有している了解事項であるが、学習者は同様に理解していないのかもしれない。

用例 5（意見の及ぶ範囲の限定）では CJL の評定が他のグループより低かった。自説の一般化は不可能だが限定された範囲には及ぶものであるという謙虚さの表示は、中国人学習者にとって意見を不明瞭に感じさせる要素であったのだろうか。

用例 6 は他に比べて全体的に数値が低かったが、中でも JNS の判定は最も低い。日本語母語話者は「私たちも年齢的に臓器提供の資格があるかどうか定かではないが・・・」の謙遜を表す前置き表現を分かりやすさと結び付けて評価していないことが分かる。

4.4 前置き表現の有無に関する評定

今回の調査では、調査協力者に各用例で用いられている前置き表現の有無の評定も尋ねた。

[表 4:前置き表現を用いた方がいいと回答された用例の数(%)]

協力者	用例の数 (%)
CJL	95(72.5%)
KJL	79(66.4%)
JNS	87(73.1%)

「前置き表現を用いた方がいい」と回答された割合は、JNS, CJL, KJL の順に高かった。JNS(73.1%), CJL(72.5%)の差はわずかでありその数が 7 割を超えていることから、両者は全体的に前置き表現の使用を評価していると言える。

韓国人学習者は、全体の 66.4%の割合で前置き表現を用いた方がいいと回答した。ある韓国人調査協力者はフォローアップインタビューで、「韓国人は早く本題である意見を言いたがるため、前置きを頻繁に用いることはない」と答えていた。この回答に反映されるように、調査シートにより前置き表現に注意が向けられている状況においても、彼らの前置き表現の使用に関する評価が他のグループより低かったのは、母語や自国文化の影響があるかもしれない。筆者が経験した韓国人の韓国語使用場面では、「ほかでもないのですが」「あることはあるのですが」等、日本語に類似した前置きが用いられていたことを記憶しているが、意見提示場面で主張を円滑に行う手段としてこれらが使用されているかどうかは断定できない。

次に、表 4 の内容を用例別に分け、詳細を比較する。

[表 5:前置き表現を用いた方がいいと回答された用例別の数(%)]

	CJL	KJL	JNS
用例 1 (主張の権威付け)	18(81.8%)	15(75.0%)	17(85.0%)
用例 2 (説得の下地作り)	16(72.7%)	14(70.0%)	16(80.0%)
用例 3 (前提になる事柄の提示)	18(81.8%)	16(80.0%)	10(50.0%)
用例 4 (話題に関与する人への配慮)	16(72.7%)	13(68.4%)	17(85.0%)
用例 5 (意見及び範囲の限定)	14(66.7%)	15(75.0%)	19(95.0%)
用例 6 (書き手の謙遜の表示)	13(59.1%)	6(30.0%)	8(42.1%)

表 4 で CJL と JNS を比較した際に、前置き表現を用いた方がいいと回答された用例の合計は、両者でわずかな差しかなかった。しかし、表 5 が示すとおり、用例別に数を比べると中国人学習者では用例間の差が小さいのに対して、日本語母語話者では用例間に差がある。カイ 2 乗検定を行って調べた結果、両者は有意な差であることが分かった。つまり、日本語母語話者は用例ごとに前置き表現の存在を検討し、すべての用例での使用を肯定的に評定しているのではなかった。

今回の調査は、調査シートの配布・回答ともに郵送で行い、回答にかける時間は特に指定しなかったため、協力者がじっくり時間をかけて回答したかどうかは分からない。また、表 4 及び表 5 で分析した質問は二者択一で回答するものであったため、CJL が前置き表現の使用の意義に過剰に反応してしまった可能性も否めない。

また、4.1 の用例別の評定では、日本語母語話者の用例 3 (前提になる事柄の提示) の値が高かったことを確認したが、前置き表現自体の存在の効果を問うた質問では、50.0%の協力者が「あった方がいい」と回答したのにとどまった。用例別の平均では、10 種類の項目をすべて合計し平均値を算出したが、前置きの有無自体を問う内容では、二者択一で回答を得たため、異なる結果が出たのだろうか。反対に、同用例に対する中国人学習者の値が 81.8%と高かったことは、山下・ファン (2001) の「中国人学習者は、意見の客観性を確立しようとする傾向があり、事実の羅列、常識の強調、当然であることの確認が多かった」と一致する結果であった。

表 5 で日本語母語話者の値が高かったのは、主張の権威付け、説得の下地作り、話題に関与する人への配慮、意見及び範囲の限定である。彼らは、説得の準備を行ったり対人的な配慮を表したりする前置き表現の存在を評価する傾向があったと言える。

5. まとめ

本稿では、日本語母語話者及び学習者を代表して中国人・韓国人学習者が意見提示箇所を読んだときの前置き表現に対する印象の相違を調べるために、調査を行い結果をまとめた。

今回の調査で、日本語母語話者と学習者が意見提示場面の前置き表現の使用について、少なくとも部分的に異なる印象を持っていることがわかった。

具体的に観察されたことは、以下のとおりである。

- ① 全体的に、日本語母語話者及び中国人日本語学習者は前置き表現の使用を評価していた。
- ② 日本語母語話者は、対人的な配慮を示したり説得の下地を築いたりするための表現を評価する傾向があった。
- ③ 日本語母語話者には用例間で前置き表現の評価に差が見られたのに対して、中国人学習者には差が見られなかった。
- ④ 韓国人日本語学習者は読み手に配慮する表現より意見を明確に述べる機能を持つ前置き表現を高く評定した。

6. 今後の課題と日本語教育への応用

学習者が日本語における意見を表す文章にて効果的に前置き表現を用いながら主張を展開するためには、前置き表現が体系的に整理され、学習者に提示されることが望まれる。今後は、作文の授業等で使用されている日本語の教科書で前置き表現がどのように紹介され、現場で指導されているのかを調べる予定である。また、学習者の母語での意見提示の方法を調べ、日本語における前置き表現の使用と比較してみたい。

前置き表現に関する研究はまだわずかだが、その研究成果は作文指導に止まらず、スピーチにおける意見表明や聴解・読解指導における意見箇所の予測にも応用可能な意義あるものであると考える。

付記 本研究は平成 11 年度文部省科学研究費補助金（平成 11 年度奨励研究(B)課題番号 11902011）による研究成果の一部である。

謝辞 本調査を行うにあたり聖心女子大学の菅原健介氏にご協力をいただいた。ここに感謝の意を表したい。

参考文献

- 生田少子（1997）「ポライトネスの理論」『月刊言語』6 巻 26 号，66-71，大修館書店
- 木戸光子（2001）「作文教育のための留学生と日本人学生の意見文の比較」『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 杉戸清樹（1998）「敬語教育の課題－敬意行動の中の敬語を－」『日本語学』第 16 巻 13 号，81-88

- 梶本総子（1997）「意見文の構造－中・上級学習者の作文における問題点－」『大阪大学留学生センター研究論集多文化社会と留学生交流』創刊号，79-91，大阪大学留学生センター
- 坂東正子（1998）「日本語学習者の文章における文脈展開」『日本語・日本文化研究』7号，大阪外国語大学日本語講座
- 泉子・K・メイナード（1993）『会話分析』くろしお出版
- 山下みゆき（2001）「日本語学習者の前置き表現の使用の実際－課題に基づく意見文より－」『日本語教育のためにアジア諸言語の対訳作文データの収集とコーパスの構築』平成11-12年度科学研究費補助金基盤研究(B)(2)研究成果報告書，国立国語研究所
- 山下みゆき・サウクエン ファン（2001）「意見提示の opening marker としての前置き表現－日本語母語話者と中国人学習者の比較－」『日本語教育学会秋期大会予稿集』日本語教育学会
- 李吉鎔（1999）「反対意見表明に関する対照社会言語学的研究－韓・日の大学生を中心に－」大阪大学大学院文学研究科修士論文
- 李善雅（2001）「議論の場における言語行動－日本語母語話者と韓国人学習者の相違－」『日本語教育』111号
- Brown, P. and S, Levinson(1987). *Politeness: Some Universals of Language Usage*. Cambridge : Cambridge UP.